

# 18世紀の自然詩におけるジェイムズ・トムスン

門 井 昭 夫

## James Thomson Viewed in the Light of Eighteenth Century Nature Poetry

Akio Kadoi

### 抄 録

古来、人間は自然に対して抱いた感情を素直に表出し、詩に詠んできた。それらの詩には自然に対して子供の抱く新鮮な喜びを詠んだものがある。これは昔のバラッドやチャプマンの詩に豊富に見られるほか、シェイクスピアやミルトンの詩にも見られる。これとは対照的に、事物の形と色とを忠実に表現し、主題に向かい合う詩人の目で自然の風景を描写し、言葉によって自然の絵を描く方法、即ち叙景詩がある。さらに、人間の魂と自然の魂との間の調和を通して詩人の中の想像的共感へとつなげるものがある。また、自然詩の最も普遍的な形として、自然と精神の世界との類似性を認識するものがある。

18世紀の前半における叙景詩人の代表としてジェイムズ・トムスンとジョン・ダイアーの名が挙げられる。二人は同時代の人々を田園に回帰させた最初の詩人であった。トムスはダイアーとは違い、自然の明るい美しさ、平穏と静寂とを表現するだけではなく、雨と嵐の中の、雪と厳寒の中の山岳風景の重々しく、陰鬱で荘重な美しさを生き生きと表現している。トムスは18世紀において田園のより厳しい面を活写する最初の詩人であった。彼にとって自然は畏敬すべき神の力を地上に明示するものであった。彼の自然描写の特色が『四季』によって具体的に考察され、またその用語法の特徴が述べられる。

キーワード：ジェイムズ・トムスン

ジョン・ダイアー

『四季』

18世紀

自然詩

自然は人間の理性と心に常に深い影響を及ぼしてきた。自然はいつも人間の心を捉えようとし、広大で崇高であることで人間の心を高める。その方法は多様で神秘的である。ある時はその美しさで人の心に喜びを与え、またある時はその荒涼とした風景で人の気を減入らせ、またある時はその静けさで人を元気にする。

古来、人間は戸外における楽しみの場として自然を詩に詠んできた。純朴な人々もみな自然に対して抱いた感情を表出してきた。天然の何かこの世のものとも思えない美しさが、心の中に楽しさの感情と織りなしたものを、人は詩に詠んできた。ガリレオ、ニュートンによる17世紀の科学革命の後、それまで支配的であったキリスト教の自然観に大きな変化が生じた。自然科学の思想が広く影響を及ぼした18世紀には自然はどのように詩に詠まれたのか、詩人は自然に対して如何なる関心を抱いて自然と向かい合ったのか。この時期における叙景詩の代表的詩人であるジェイムズ・トムソンの『四季』における描写の特色、自然に対する態度、用語法の特徴は何か。これらの問題について、本稿では考えてみたい。

## 1. 自然の様々な詠み方

自然の詩の詠み方には古来様々なものがある。まず自然に対して鋭敏な、子どもの抱く新鮮な喜びを詠んだものがある。これは昔のバラッドやチャプマンの詩に豊富に見られるだけでなく、シェイクスピアやミルトンの詩にも見られる。またワーズワスの短い詩、ジョン・クレアの詩もその喜びに浸っている。古い詩では“Summer is y-commen in, / Loude sing, cuckoo!”と始まる作者不詳の *Cuckoo Song* (c. 1250) がある。

ワーズワスの、よく知られる「虹」の詩も自然に対する喜びと敬愛の念に溢れており、次のように詠んでいる。“My heart leaps up when I behold / A rainbow in the sky / ... I could wish my days to be / Bound each to each by natural piety.”

自然に対する新鮮な喜びを表現する詩と対照をなすのが、事物の形と色彩を忠実に表現し、主題に対する詩人の目で自然の風景を描写し、言葉によって自然の絵を描く方法である。これは叙景詩の典型と言えるものである。

自然の概念を生きた魂の色に染まったものと考えられるものがある。これは人間の魂と自然の魂との間の、あらかじめ考えられた調和を通して、詩人の中にある想像的共感へとつながるものである。これは詩人に自然研究者的解釈の能力を賦与し、また人間の魂と自然の魂との間のことを黙考する力をも賦与する。

さらに、自然と精神の世界の類似性を認識するものがある。これは自然の現われを道徳的、精神的世界の象徴として見ることを人間に促す。この象徴的解釈はおそらく最も古くからのものであり、あらゆる時代の、またすべての言語における自然詩の最も普遍的な形であろう。自然現象から引き出されるイメージは数限りなくある。自然詩自体があまり目立たなかった時代においてさえ、イメージ、直喩、隠喩はわれわれの周囲から引き出され、種々様々にあった。それは言葉、とりわけ詩の言葉にそういうイメージなどが染み込んでいたという単純な理由からである。

18世紀の前半における叙景詩の代表例がトムスン (James Thomson) の『四季』 (*The Seasons*, 1726-30) とダイアー (John Dyer) の『グロンガー丘』 (*Grongar Hill*, 1726) である。これらの詩の目的は風景と自然現象の描写をすることである。自然現象は主題に変化をつけるために、人間的または教訓的な部分にちりばめられている。この類の詩は近代に成長したものであり、この二つの詩は自然風景の描写をもっぱら行った最初のものである。

トムスンの場合、『四季』の中でもとりわけ「冬」 (*Winter*) において、常にその眼前にあったのは生まれ故郷スコットランドのボーダーズ地方のチェヴィオット丘陵の自然であった。もっとも、トムスは人間的関心事を挿話として入れることで詩に様々な変化をつけている。他方、ダイアーは短い詩においては主題から逸れることはほとんどせず、風景を見て黙想することから自ずと生まれる考えをあちこちでわずかに強調するだけである。

トムスン、ダイアーは共に同時代の人々を田園に回帰させた最初の詩人であった。トムスは当時の詩の主題を「低劣で墮落したくだらぬ」<sup>1)</sup>ものと批判し、自然界の諸相を主要な、また唯一とさえ言えるテーマとして選ぶ洞察力と勇気を具えていた。そして自然界の諸相を大きな連続する詩に英語で書いた最初の詩人であった。これがトムスンの大きな特質であり、長所であった。彼の詩の興趣は全くこの自然界の描写にあり、それと絡み合う人の世の挿話または出来事にはない。

## 2. 自然に対する詩人の関心と態度

自然を生きた靈魂に満ちたものと考えたのはワーズワス (William Wordsworth) であった。これは彼がなした詩への貢献の一つである。ワーズワスは宇宙における限りなく偉大な靈魂という考えを創造し、これを Nature と呼ぶ人間という形で擬人化した。彼は自分の詩の到るところでこの形を用いている。彼にとって自然は一人の人間であり、それ自身の生命を持つ。宇宙全体における一つの人格を持った存在として、彼は自然を認識した。さらに彼は外界というそれぞれの形で、それぞれ別個のものの中にある明確な生命として自然を再認識する。

自然に対する愛は移り変わる季節の美しさを鋭敏に感じることを自明のこととする。そして落日と日の出、月と星、海と空、丘と谷、鳥の囀りと花の香り、小川と樹木と森の美しさを、そして小麦畑と牧草地と農家の庭、春の幼い生命の魅力を鋭く感じ取ることを求める。そのみならず自然への愛は農夫と作男、刈取り作業手伝いと羊飼いや、釣師と猟師というような仕事に携わる田舎の人々自体に対する強い関心をも含む。また、そのような人々の生活習慣と風習、それらの人々の繁栄と幸福、苦難と苦悩、困窮の下での堅実な生き方と不屈の精神、ありのままの物質主義をも含む。具体的には彼らの猟・釣りとその獲物、収穫祭と求愛、彼らの素朴さ、さらには子供たちの無邪気さに対する関心であるが、それは要するに自然で編み上げる人間生活に対する関心であり、自然力との直接的接触に対する関心である。

自然詩にとっての諸条件は18世紀前半にはさほど好ましいものではなかった。都会の生活と都会の教養ある社会層が有名な作家にすっかり夢中になっていた時でも、田園は全く無視されるということはなく、田園の生活と自然に対する関心はこの時代の末頃には復活し始めた。ポーブ (Alexander Pope) と彼の仲間は田園詩にはほとんど貢献しなかったが、正しい、優雅な言葉遣いに注意を集中することで、彼らの後に続き自然を再び詩の主題にした詩人たちには大いに役に立ったに違いない。

18世紀前半という時期は当然のことながら二つに区分される。トムスンの「冬」 (*Winter*, 1726) の出版前と、その後のグレイ (Thomas Gray) の『田園墓畔の哀歌』 (*Elegy Written in a Country Churchyard*, 1750) の出版に至る時期である。「冬」の出版は、ポーブが名声を博していた時で、詩の新しい主張の先触れとなった。18世紀の第二の四半世紀には自然に対するこの新生の関心が他の要素と結びつく。人間に対する、より普遍的な関心、哀愁の礼讃、想像力の再生が見出される。この傾向はグレイの『哀歌』に誰もがその表現を見出すものであり、英詩におけるもう一つの際立った特色となるものである。人の死を主題にし、物悲しく思索的な詩を書いた詩人はしばしば場を墓地に設定したので、墓地詩人 (Graveyard poets) または墓地派と呼ばれる。グレイのほか、その主な例を挙げればパーネル (Thomas Parnell) の「死の夜想詩」 ('Night-Piece on Death', 1721)、ヤング (Edward Young) の『夜想』 (*The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death and Immortality*, 1742-45)、ブレア (Robert Blair) の『墓』 (*The Grave*, 1743) がある。

### 3. トムスンの自然描写

トムスンの自然に対する愛はエディンバラ大学時代に早くも示された。彼は自然詩に魅力を感じた学生グループの一人であった。当時のエディンバラは文学の面ではロンドンの流行から独立しており、全く違った非常に不自然な状況が支配していた。自然に対するスコットランド人の関心がイギリスの詩において強い力となったのは、主としてトムスンを通してであった。もっとも、ラムゼイ (Allan Ramsay, 1686-1758)、マレット (David Mallet) もまたその役割を担った。ラムゼイは既に『優しき羊飼』 (*The Gentle Shepherd*) を1725年に出版していたが、これはスコットランド方言で書かれ、その靈感は田園の風俗、またスコットランドの歌とバラッドから受けた。その結果、彼の田園詩はイングランドの読者には正当に評価することが出来なかった。他方、トムスンは、主題の選択に当ってはスコットランドの気風に影響されはしたが、英語で書いた。トムスンは「冬」ではまずスコットランドの風景に限ったのであろうが、残る三つの季節ではイングランドの田園生活と風景がより顕著である。「冬」の成功は出版されて間もなく、とりわけこの詩が次第に『四季』へと拡大した時に、確かなものとなった。<sup>2)</sup>

「冬」の出版される四半世紀前の田園詩を見てから「冬」を新鮮な眼で読んでみると、たちまちそのテーマが全く新しいことに感動し、「冬」がイギリスの文学において新紀元を画したものであることが解る。トムスンはダイアーのように田園を田園のために描

いている。もちろんこのことは顕著ではあるが、それだけではなく、トムスはまた雨と嵐の中の、雪と厳寒の中の山岳風景の持つ重々しく、陰鬱で荘重な美しさを生き生きと表現している。彼は18世紀において田園のより厳しい面を描写する最初の人であった。トムスの関心は自然に集中した。彼にとって自然は畏敬すべき神の力を地上に明示するものであった。それは自然の諸要素の音と動きに満ちた野外劇であると言える。トムスは自らの直接的経験から書いたものであり、他者の目を借りて自然を見ているのではない。

トムスは山々をより精確に、荒天の、陰鬱な冬の美しさの中に描いている。彼は一つの特別な風景を描くのではなく、山と川、森と小川のある一般的風景を異なった気象条件の下で描いているので、その詩は一連の絵となっている。ダイアーは夏の盛りの山を描いた最初の人であるが、景色を多くの明るい色彩を使って穏やかな夏空の下に描く。彼はただ囀る鳥の快い歌声と花の芳香だけを言い、その他のものについては、描く絵には平穏と静寂とを表現している。トムスの絵は主として黒、白、灰色で塗られ、時に明るい輝きによって生き生きとした色になるだけである。彼の詩には強風の唸る音、水の音、雲の動き、風に揺れる森の動きがたくさん描かれている。

色彩は「秋」の詩行の際立った特徴である。もっとも、その色彩はほとんどが抑制されている。秋は黄色の長い衣をまとった季節として描かれる。詩人は黄褐色の牧草地をさまよい、森は以前は鮮やかな緑をまっていたが、今は黄ばんだ色をしている。漂う霧は黒っぽいマントに包まれた芝地に沿って滑るように動いてゆく。夜になると星が生き生きと輝く。美しい月が「深紅に染まった東の空に」(in the crimson'd East)見え、「広大な濃青色の景色の上を」(o'er the broad cerulean Scene) 詩神が高く舞う。「青白い光の氾濫が漂い」(the pale Deluge floats)、揺れ動く影を通してかすかにきらめく。朝は大地が露で銀色に光る。にわか雨の降る「春はすべてのものが緑に萌え」(whatever greens the Spring)、果実は「夏には赤らむ」(Summer reddens)。「秋の実りが大地を黄金色に染める」(Autumn's yellow Luster gilds the World)。これらの引用部分では自然の動きと音とはあまり目立たず、すべてが静かに生きている。

冬そのものの描写は夜のうれしくない雨とその影響で始まる (*Winter*, ll. 72-105)。当然のことながらこの一節にはほとんど色彩がない。ところが動きと特に音は非常に目立つ。次の叙景の一節 (*Winter*, ll. 118-194) では生気のない空から太陽が沈み、月が上る。そしてミヤマガラス、フクロウ、ウの鳴き叫ぶ情景に続いて海上と陸上との強風と嵐が描かれる。ここで色彩に触れているのは夕日の「火のように赤い光線」(red fiery Streaks)、「鉛色の東の空」(the leaden-colour'd East)、「白くなりゆく輝き」(the whitening Blaze)、「変色した海原」(the discolour'd Deep)、「騒々しいミヤマガラスの黒くなってゆく一団」(a blackening Train of clamorous Rooks)、「黒々とした夜」(the black Night) である。トムスの筆が冬の雪と厳しい寒さに移ってゆくとき、色彩は著しい特徴となる (*Winter*, ll. 223-275)。

トムスは昼となく夜となく様々な空の表情を綿密に研究したに違いない。それは雨

のとき、嵐のとき、雪のとき、日の照るとき、あるいは星が輝き、あるいは月の照るときであった。これらの描写の中で、トムスンが使っている形容語句のいくつかは驚くほど写実的であるが、これは絶えず心をこめて観察した結果であろう。

もう一つの著しい特徴は水の音と動きである。奔流と小川とは轟く音を立て、ほとばしり出、泡立ち、すさまじい音を立て、震え、逆巻き、急転換し、ごぼごぼと音を立てるといのように、様々に描写される (*Winter*, ll. 94-105)。

田園の、また牧歌的な筆致は働く人々に及ぶ。それは森で働く樵<sup>きこり</sup>、突風に向って息を切らしながら苦労して歩む旅人、雪におおわれた牛は農作業後に餌を求め、吹き積もる雪に羊の群れが圧倒されないように注意深く番をする羊飼いなどである。

自然における人間の位置に関して、ワーズワスは大いなる全体の一部と見るが、トムスンは人間をそのようには見ない。トムスン自身の自然に対する態度は畏敬の念に満ちて熱狂的に讃美する、というものである。人間と自然とは二つの別々の存在であり、人間にとっての自然は強い喜びと幸福の源である。人格を具えた神を信ずるものとしてトムスンは自然の中に神の偉大さの現われを見る。

NATURE! great Parent! Whose unceasing Hand  
Rolls round the Seasons of the changeful Year,  
How mighty, how majestic, are thy Works!  
With what a pleasing Dread they swell the Soul! (*Winter*, ll. 106-109)

自然よ！ 偉大なる親よ！ その止むことなき手は  
変化に富む一年の季節を巡らす、  
何と力強く、何と堂々たるか、その業は！  
何と快き畏敬の念を抱かせて自然の業は心を高めてくれることか！

トムスンの描写する風景は、その主な特徴から区別できるほどスコットランドのものではない。「春」「夏」「秋」では時々、ジェド川沿いの丘の山腹とトウィード川沿いの平野の記憶のみから書かれたと思われる詩行が見出される。また「冬」の描写は、少年時代にカーター丘とチェヴィオット丘陵の斜面からじっと見つめた吹雪が、荒々しく押し寄せる様の思い出であることは明らかである。彼の描写は概してイングランドの風景を取入れているが、それは実際のところ理想化された美しい風景である。これは後のクラブ (George Crabbe) の『村』(*The Village*, 1783) に描かれた暗く寒々とした田園風景とは著しい対照をなす。しかしながら『四季』全体の構想とその結果はトムスンを稀に見る独創的な能力を持った人になっている。

もしもトムスンが後に住んだリッチモンドを流れるテムズ川によってのみ育てられ、スコットランドの広々とした荒野と山の風景を知らず、またジェド川とルール川の水源のほとりの丘陵地にかかる天と動く雲の多様な広がり知らなかったならば、『四季』を特徴づける自然の種々相を扱うあの斬新で自由な想像力の大きな広がりを得ることは

なかったであろう。これはトムスンが「冬」の始めて自らの少年時代について言っていることから明らかである。即ち、

Pleas'd have I, in my chearful Morn of Life  
 When nurs'd by careless Solitude I liv'd,  
 And sung of Nature with unceasing Joy,  
 Pleas'd have I wander'd thro' your rough Domain;  
 Trod the pure Virgin-Snows, myself as pure;  
 Heard the Winds roar, and the big Torrent burst;  
 Or seen the deep fermenting Tempest brew'd,  
 In the grim Evening-Sky.... (Winter, ll. 7-14)

屈託ない孤独のうちに育った  
 快活な子供の頃、私は楽しく、  
 絶え間なき喜びを持って自然を歌った。  
 自然の荒野をさまようのが嬉しく、  
 自分と同じように清らかな処女雪の上を踏み歩き、  
 風の唸りと大きな急流のほとばしりを聞いたり、  
 暗い夕空に、  
 大きな嵐が醸し出されるように起こるのを見た。

トムスは自然のいろいろな様相に対して極めて強烈にして純粋な愛を抱いていた。彼は季節により異なった様相を見せる自然に大きな喜びを覚えたが、それは彼の時代以前に誰も同じように喜びを味わったことのない領域であった。それは春の若々しい緑ときらめきから、夏の光輝、秋という衰えゆく素晴らしい季節、そして冬の押し寄せてくる寒さと嵐に至るまで、自然の諸相はトムスの心をあらゆる面から感動させたのであった。

#### 4. トムスンの用語法の特徴

トムスはミルトンを手本にして『四季』を無韻詩で書いた。マコーレイ (G. C. Macaulay) が『ジェイムズ・トムスン伝』で言う。「用語法と表現に関しては、トムスは概してミルトンのラテン語風の語彙を大いに再現し、ミルトンのスタイルの幾つの特徴を誇張したので、それらが退屈な型にはまった手法になるほどであった。トムスは、例えばラテン語起源の見なれぬ語を非常に数多く使ったが、より簡潔な表現で間に合う場合においてさえもそのような語を用いたのであった」<sup>3)</sup>と。多くの場合、これらの語はミルトンが使うのは荘重な場合であるのに対して、トムスは瑣末的な所で用いている。

この用語のことは『四季』全体には当てはまらない。「冬」の初版ではそれ程はつき

りとはしていない。これに関連して忘れてはならないのは、この詩の主題が畏敬の念を抱かせる荘重なものであり、詩の大部分を通して主題が陳腐なものに墮することがほとんどないので、トムスンの言葉遣いの大袈裟なことは、その後にかかれた他の季節に比べて、「冬」においては退屈なものではない。

普通の動物や事物の名称に持って回った語句を使っているのは、その当時の型にはまった手法であった。したがって、例えば 'bird' という語は、鳥への言及が数度あるにも拘らず、この詩では一度も用いられていない。ナイチンゲール (nightingale) は 'Philomel' と呼ばれ、鳥類 (birds) は 'the wanderers of heaven' また 'the fowls of heaven' と呼ばれる。猟鳥は 'the feathering game' と呼ばれ、猟獣は 'the footed game' として表わされる。鳴き鳥は 'the tuneful' であり、家禽は 'the household feathery people'、雌鶏は 'female train of the cock' である。羊は sheep とは表現されず、'the bleating kind' (メェとなく種類)、羊飼いは 'helpless charge' (助けを必要とするものの世話を託された人) と表わされる。

ミルトンから借りた語句で、形容詞または形容語句の代りをする限定語句をセンテンスの末尾に置くというのがある。マコーレイはこの点に注意を喚起している<sup>4)</sup>。当時の詩はこれを行の始めになるようにして強調する効果を出しているが、トムソンはこの型にはまった手法からは免れている。「冬」の第一版において、少なくともラテン語からきた形容詞に関してはそう言える。

トムスンの作風のもう一つの著しい特徴は複合語の使用であることにマコーレイは着目している。上述の動物や事物の名称のほかに、複合形容詞がとりわけ特徴的である。複合形容詞では第一要素が副詞として用いられる形容詞であり、第二要素が分詞である。例えば "wide-dejected Waste", "mute-imploring (cattle)", "modest-seeming Eye", "mossy-tinctur'd Stream", "breezy-ruffled Lake" など、『四季』には多数見られる。しかし、この複合形容詞は、他の詩人、例えばフィリップス (John Philips) の作品 (Cyder, 1708) にも、close-wrought, frequent-rising, quick-circuiting などのように幾つか見出される。トムスンの無韻詩をフィリップスのそれと仔細に比べてみると、トムソンの『四季』の韻律もまたフィリップスの Cyder の影響を受けていることが分かる。

複合形容詞の使用はサマヴィル (William Somerville) にも見られる。サマヴィルからの例としては swift-stretching, fierce-menacing, loud-clamouring, slow-winding, full-beaming などがある。したがって、複合形容詞はトムソンだけの特徴ではないことになる。

## 5. 結 び

トムソンは説明のため、あるいは出来事、人物、挿話を強化する目的で自然を探し求めたのではなかった。彼は本質的には、神の力の現われとしての自然界に対する敬虔で畏敬の念に満ちた崇拜者であったが、他の詩人、とりわけワーズワスが自然の中に見出した象徴性を見出すことはなかった。神の力は堂々として、絶大で恵み深いものであ



り、偶然の中とそれを越えた所に存在する、とトムスは信じていた。彼の描く自然の絵は主に黒、白、灰色で塗られ、時に明るい輝きを加えられて生彩あるものになった。彼の詩には風の唸り声、水の流れる音、雲の動き、風に揺れる森の動きが多く描かれている。

ほとんどの真の詩人がそうであるように、トムスは鋭敏な感覚を具えていて注意深く、正確な観察者であった。彼は新鮮な眼と開かれた心を持って自然を見、そして詩に詠んだのであった。

## 注

---

- 1) Thomson, J., Preface to the second edition of *Winter* (1726).
- 2) Kadoi, A., On *Winter* of James Thomson's *The Seasons* (*The Bulletin of Health Science University*, No.1, 2005).
- 3) Macaulay, G. C., *James Thomson* (Macmillan, 1908), p. 157.
- 4) *Ibid.*, p. 161.

なお、『四季』のテキストは *The Seasons*, edited by James Sambrook (Oxford U. P., 1981) によった。

## 参考文献

---

- 1) de Haas, C. E., *Nature and the Country in English Poetry of the First Half of the Eighteenth Century* (Amsterdam, 1928).
- 2) Hebron, S., *The Romantics and the British Landscape* (British Library, 2006).
- 3) Sambrook, J., *The Eighteenth Century : The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1700-1789* (Longman, 1986).
- 4) Scott, M. J. W., *James Thomson, Anglo-Scot* (University of Georgia Press, 1988).
- 5) Sutherland, J., *A Preface to Eighteenth Century Poetry* (Oxford, 1948).
- 6) Veitch, J., *The Feeling for Nature in Scottish Poetry*, 2 vols. (William Blackwood, 1887).

## Abstract

Nature at all times has influenced the head and heart of humans. Humans have expressed their feeling towards Nature in songs. Nature often exhilarates people with her beauty, sometimes depresses them with her bleakness, and restores them with her calm ; their spirit is elevated with her vastness and sublimity in mysterious ways. The fresh childlike delight in Nature is found in Shakespeare and in Milton as well as in old ballads and in Chaucer.

In contrast with the expression of this childlike delight in Nature, there is poetry whose object is the delineation of scenery and natural phenomena. James Thomson and John Dyer describe scenery in each of their masterpieces, Thomson's *The Seasons* and Dyer's *Grongar Hill*. They are the first poets to lead their contemporaries back to the countryside in the early eighteenth century. Especially Thomson writes from first-hand experience, and is not looking through the eyes of others. He describes not only the glorious and mild aspects of the land, but also the sterner aspects of Nature. He is a close student of the sky in all its various aspects, in the day and the night ; with rain, and storm, and snow ; with the sun, or the moon. The features of his description of Nature will be considered on *The Seasons*, and the character of his diction will be studied as well.

Key Words : Thomson, James

Dyer, John

*Seasons, The*

18th century

nature poetry